

新年を迎えるに当たって

人生 50 年の頃には、「村の渡しの船頭さんは今年六十のお爺さん」と歌われていましたね。今や人生 100 年といわれる時代。まさしく昭和 15-16 年生まれの私たちこそ“今年八十のお爺さん”に当たるのではないかと思います。しかし、さて八十路坂を超えてみると、体調を崩して難儀する同輩が思いのほか多いことに気が付きました。そうだ、八十路坂を元気に超えていくためには何か極意を得る必要があるのではないかと思います。始めていたところに、日経新聞の「人生 100 年の羅針盤」という特集記事に出会いました。そして、その最初のコラムに登場しているのが倍賞千恵子さん。すっかり忘れかけていた存在だけに新聞紙面を通じての再会はなにかとても懐かしい思いがしました。かつての国民的スターも昭和 15 年生まれ。私たちと同じように“今年八十のお婆さん”になっていたんですね。そしてそこで語っている倍賞千恵子語録は私たち“今年八十のお爺さん”にとっても貴重なものとなるのではないかと思います。以下にその語録をご紹介します。ご参考になさってみてください。

年齢なんて、ただの数字に過ぎない

決して偉ぶることがなく、誰からも愛される庶民派の女優だった倍賞千恵子さんは、インタビュワーの「自分の年齢や残りの人生を意識することはありますか」という質問に対して、ごく気楽に「**年齢なんて、ただの数字に過ぎないんじゃないかな**」と思っています」と答えています。恐らく「八十路坂超えの大変さ」なんて意識していないのでしょうね。倍賞千恵子さんは、腎臓結石から乳がんに至るまで様々な病気に苛まれて本日に至っているというのに、なんという明るさの持ち主なんだろうと思います。

今という時間を精一杯楽しめればいい

倍賞千恵子さんは、ある住職から「死ぬことは生きることです」と言われて「ハッとしました」と語り、「考えてみると、人はいつか必ず死ぬけれど、逆に死ぬ瞬間までは生きているわけです。だから生と死はつながっている。」と語り「肩の力がスッと抜けました。」と語り継いでいます。ここから更に「そうか！これまで通り、死ぬまで出会いを大切にし、目の前の人に尽くし、**今という時間を精一杯楽しめればいいんだ。**」と気づいたことが、倍賞千恵子さんが明るさを保っていることの要因になっているようです。

死ぬまで出会いを大切にする

そうか、「目の前の人に尽くす」ことねえ。倍賞千恵子さんは「俳優と歌手、一つだけに絞らずに続けてきて、本当に良かったなと思います。」とも述べています。倍賞千恵子さんにとっては、俳優と歌手という“仕事”が「目の前の人に尽くす」ことにつながっていたんだなと思います。私も東芝在勤時代に「お客様にご満足していただけるからこそ会社は売り上げを立て従業員にお給料を支払うことができるのです」と教わって元気をもらったことがあります。が、“仕事”を持たない“今年八十のお爺さん”はどうしたら良いのだろう。しかし改めて考えてみると「**死ぬまで出会いを大切にする**」一面さえあれば、結果的に「人に尽くす」ことにつながるのではないかと思います。本当に「楽しむ」ためには、自分のベストを尽くす必要があるのですから、その過程で間接的な形にせよ「人に尽くす」側面は生じてくるものだと思うからです。例えば私などは、気軽な Facebook の送り手と受け手という出会いの中からでも、心込めた映像情報を送ってこちらの心を温めてくれた送り手から「尽くされた」という思いに浸っ

ています。

気楽な友人の輪がどれだけ広がるのか

倍賞千恵子さんも、「職業がどうとかは関係なく、皆が平等な立場で力を合わせて人生を楽しむことが自分の生きがいになっています」と述べ更に「人生 100 年時代。仕事を離れ、**気楽な友人の輪がどれだけ広がるのか**。いつもワクワクしています。」と語っています。日経新聞「人生 100 年の羅針盤」を担当された編集委員の小林明さんも、倍賞千恵子さんが、映画「男はつらいよ」の台本を初めて見た時に「自分が育った下町を思い出した」と言ったという旨書いています。「血のつながりがなくても人間の絆は作れる。介護、防災、生きがい…問題の処方箋は、かつて当たり前だった下町の風景に隠されている気がする。」と小林明さんは結んでいます。

好きなことに熱中し、友人と楽しく人生を過ごす

しかし、世の中が変わったとはいえ、倍賞千恵子さんの生き様は下町風情のまま。そして近所づきあいもしながら気楽な友人の輪を広げていく中で、「元気の源は無理しない自然体の生き方」と称し、「**好きなことに熱中し、友人や夫と楽しく人生を過ごす**。そんな環境が最高の健康法かもしれませんね。」という健やかで明るい“今年八十のお婆さん”ぶりを発揮していられるのだらうと思います。そうですね。マスメディア論調をそのまま受け入れて「かつて当たり前だった下町がなくなって今は楽しく人生が過ごせる時代ではなくなったのだ」なんてふさぎ込んでいても一つもいいことはありませんものね。

“とりあえずの新たな 3 年間”に向けて

ここに抽出した倍賞千恵子さんの言葉はいずれも新しいことではなく、私たちも自分自身の生活信条に採り入れようかと思ったことがある言葉ばかりなのではないでしょうか。倍賞千恵子さんのすごいところは、自分自身の考え方として採り入れて実践しているところだと思います。爽やかな“今年八十のお婆さん”になられている姿を見て、大変な遅れさせながら倍賞千恵子ファンになりました。私が現在使っている「3 年連用手帳」も今年が最終年度。“とりあえずの新たな 3 年間”に向けて、「今という時間を精一杯楽しむ」、「死ぬまで出会いを大切にする」、「気楽な友人の輪を広げる」、「好きなことに熱中し、友人と楽しく人生を過ごす」、「今という時間を精一杯楽しむ」という言葉をモットーとして採り入れ、新たな「3 年連用手帳」の冒頭にも書き込まなくちゃと思っています。お互いに「年令なんて、ただの数字に過ぎない」と口にできる健やかで明るい“今年八十のお爺さん”になりたいものです。小田高 11 期会活動やこのホームページ(Web11)によって、今後一層良い刺激を授受し合えるようになったらと願っています。先ずは何より、どうぞ、良いお年をお迎えください。